琉球大学学術リポジトリ

[書評] 深澤秋人(FUKAZAWA, A.)著『近世琉球中国交流史の研究』

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2016-06-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山田, 浩世, Yamada, Kousei
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34188

［書　評］

深澤　秋人（FUKAZAWA, A.）著
『近世琉球中国交流史の研究』

榕樹書林　2011 年　400 ページ

山　田　浩　世*

本書は、琉中関係史・海域アジア史の研究者である深澤秋人氏の初の単著論文集である。『近世琉球中国交流史の研究』と題し、「居留地・組織体・海域」の副題が付けられている。本書は、深澤氏が 1990 年代後半から 2000 年代初頭にかけて発表した論考をまとめたもので、全七章に序論・結論を加えた構成をとる。これまでに複数の評者から書評がなされている［麻生 2011］［前田 2011］［松浦 2012］。本書の構成は以下の通りである（括弧内は初出年）。

序論、琉中交流史における渡唐使節の位置づけ（新稿）
第一章、居留地としての福州琉球館（初出 2005 年）
第二章、福州琉球館の変遷（初出 2000 年）
第三章、渡唐使節の編成（初出 2000 年、一部新稿）
第四章、渡唐使節における勤学人（初出 1998 年）
第五章、福州における渡唐使節（初出 1998 年）
第六章、渡唐船の往復路と文書群（初出 1999 年、一部新稿）
第七章、渡唐船の薩摩領内漂着（初出 2002 年、一部新稿）
結論（新稿）

副題として付された「居留地・組織体・海域」という三つのキーワードは、そのまま著者が序論において示す三つの課題と対応したものとなっている。渡唐した琉球人が滞在する福州の「居留地」としての問題が第一・二章、進貢使節の構造を議論する「組織体」の問題が第三・四・五章、中琉薩間の「海域」における問題が第六・七章によって論じられる。

序章では、これまでの琉中交流史研究及び渡唐使節研究の動向が整理され、先に挙げた三つの課題と対応する研究上の問題点が示される。具体的には、課題①を「琉球と中国の関係を、琉球と中国の二国間の交渉史や貿易史、あるいは琉球王国の対外関係史としてではなく、接触の場所である福州に軸足を置いた琉球・中国交流史として検討すること」（21 頁）とし、「渡唐使節の居留地であり、交流の拠点となった福州琉球館の様相や変遷、福州という都市空間における位置」（21 頁）を論ずるとする。課題②を「交流や交渉の担い手としての役割を果たした渡唐使節の歴史的性格を検証すること」（21 頁）とし、渡唐役人を含む渡唐使節全体の構成と編成過程、王府制度との関係性といった組織としての性格を論ずるとする。課題③を「日本側から琉球・中国を位置づけた「薩摩口」という視点を相対化するため、那覇・福州・鹿児島をまたぐ海域を設定し、そのな

* 琉球大学島嶼防災研究センター特命助教　Instructor, Disaster Prevention Research Center for Island Regions, University of the Ryukyus

かに福州や渡唐使節を位置づけ直すこと」(21–22 頁) とし、進貢使節 (船) が、「閩江下流域をどのように通交していたのか」(22 頁)、「薩摩領内に漂着すると、ヒト・モノ・情報の移動にどのような影響が及ぼされ」(22 頁) ていたのかを論ずるとしている。また序章では、課題③に連動し「四つの口」の一つ「薩摩口」の奥に位置づけられてきた世界 (那覇・福州の通交ルート) を海域という枠組みから捉え直し、日本史研究における「四つの口」論の深化を図るのみならず、琉中及び琉薩の交流史を連関させて把握する視点を提供するとしている。

次に著者の示す本書の枠組みを踏まえ、各章の内容を紹介したい。

第一章では、福州城外という空間に立地した福州琉球館が海域から連続する存在として捉え直され、施設内部の「居留地」としての機能が明らかにされている。福州琉球館は、元来、朝貢使節を滞在させる公館 (柔遠駅) としての側面を持つ一方で、二門内に渡唐使節達の居住、行政、祭祀、儀礼用の空間が整備されていたと述べる。

第二章では、明末から清代における福州琉球館の変遷が論じられる。全期間を通じて大規模な改修は七回行われ、とりわけ 1690 年代に琉球側の負担で滞在・祭祀施設が新設され、このことが「居留地」化への画期であったとする。

第三章では、派遣される渡唐使節の内部構造と編成過程、また渡唐後の再編過程が論じられる。正副使を始めとする上級役人の任命を皮切りに、渡唐役人・従人層・船方の面々が段階的に決定されたこと、その中で多数の主従グループが形成され渡唐使節全体を形作っていたことなどが明らかにされている。また、福州に渡った渡唐使節は、上京・存留・摘回といったグループに再編されるが、そこでは派遣時とは異なる主従が形成されるなど、進貢使節が複雑で柔軟な運用形態をもつものであったことが明らかにされている。

第四章では、私費留学生等と称されてきた勤学人の歴史的性格や制度の沿革、彼らの渡唐使節との関わりが論じられる。勤学人は久米村士より選出され、人材育成の一環として派遣されたが、中国では渡唐役人の「従内」として把握される存在であった。すなわち、勤学人は琉球側の制度であり、中国側の制度に依拠するものではなかった。また、勤学人の滞在や帰国の決定は、進貢正副使の次ぎ書きによって管理されており、緊急時の通訳や病死した者の代役など、渡唐使節と結びついた極めて公的な存在であったことが指摘される。

第五章では、福州琉球館に滞在した存留通事の歴史的役割が論じられるとともに、同通事が携わった福州琉球館を基点とした福建当局との交渉過程や文書の収発状況が明らかにされる。存留通事の基本的性格として、役職名が固定化したのは清代以降であったこと、その選出は久米村において漢文文書の作成能力に秀でた役職から行われていたことが明らかにされている。また、存留通事が、渡唐船の出入や漂流民への対応、貿易交渉などでの漢文文書の作成、琉球本国への報告文書の作成等にも関わっていたことが文書収発の事例によって示されている。

第六章では、渡唐船の派遣とともに発給される通交文書 (符文・執照・護照等) の使用状況と効力、使節の移動に伴う報告書などの収発が論じられる。符文・執照が、福州入港時に朝貢使節であることを証明する役割を果たしていたこと、帰国時を含め文書の授受が福州内港で行われていたことを明らかにしている。また、進貢船の琉球域内での移動や漂着に際し、報告書を作成しつつ別途海路・陸路を用いて発送するなど、使節が「移動する組織体」としての性格を持っていたことを論じている。

第七章では、渡唐船の復路における薩摩領内への漂着事例を整理し、ヒト・モノ・情報の移動や文書の送受とそれにまつわる外交への影響を論じている。漂着事例は、1850～60 年代に頻出していたこと、その際には、当時の中国情報 (太平天国の紛争情報等) が直接鹿児島へ届けられてい

たことなどを指摘している。また、1856 年の事例では、人員の移送に大和船が使用され、鹿児島琉球館からの文書とともに（中国からの）外交文書が送達されていたこと、翌年の中国側への外交文書の作成時期に影響が出ていたことを明らかにしている。

結論では、国家史を相対化する海域史の視点から福州琉球館・渡唐使節を軸とする歴史像の解明によって、日本史における（「四つの口」の一つである）「薩摩口」、琉球史における首里王府を主体とした二国間関係史（＝琉中関係史・琉薩関係史）への揺さぶり（相対化）が行われたとしている。

以上のように本書は、『歴代宝案』や『呈稟文集』といった漢籍史料、『琉球王国評定所文書』（浦添市教育委員会、1988～2002 年刊行）などの和文史料を駆使し、琉中交流史の基本事項に関わる福州琉球館や渡唐使節の編成構造と役割を具体的事例を示しつつ明らかにしたものとなっている。琉中間の海域を行き交った進貢使節の実態に迫る本書の意義はきわめて大きいと考える。また、本書の各議論は、琉中交流史にとどまらず琉日間の海域（や関係）を意識したものとなっており、渡唐使節が往来した空間的な広がりを示すことに成功していると言えよう。福州琉球館、渡唐使節に関る諸問題の解明を通じて比較的ミクロな視点（事例）から琉中交流史像を構造的に描き出したものとして評価したい。

次に本書の議論において評者が感じたいくつかの疑問点や問題点、想定される今後の課題について述べておきたい。

まず、序章で示された「居留地」「組織体」「海域」といったキーワードと本論との対応関係についてである。各章では、緻密で実証的な分析が展開されているものの、各議論を統合するものとして設定された各キーワード（課題）と各章の議論が、どれほど対応したものとなっていたのかについては疑問が残った。そもそも象徴的に提起された「居留地」や「組織体」といった用語の定義が十分に述べられておらず、その使用をめぐって読者側に著者の意図がどれほど伝わったのか（十分に納得できるものなのか）疑問が残る。例えば、第三章のベースとなった論文［深澤 2000］には、渡唐使節を「首里王府下における一機関」、「臨時的な人的組織というよりも『常設』機構」に見なされるのではとの見解を主張していたが、本書では説明なく「組織体」と言い換えられている。従来の「機構」や「機関」といった用語をあえて「組織体」と変更した積極的な理由、またはより抽象的な概念を用いた意図が今少し丁寧に示されても良かったのではと考える。同様に「居留地」の用語も説明されず、強く近代的な用語としての意を連想させ読者の混乱を招くのではとの点は、他の評者が指摘するところでもある［松浦 2012］。本書が提起する課題が、序章などでより整理されれば、著者の意図する視点と各章での議論の関係がより明確にできたのではと考える。

第二に、第三～五章において取り上げられた福州での再編を前提とした渡唐役人の「主従」について、使節内での役割とは異なる側面からの検討も必要であろう。本書でも整理されているように、符文や執照等に示された中国向けの進貢使節像とは別に、琉球側の編成論理に沿った渡唐使節像が存在した。また、第三章及び第四章で論証されているように、出発時の主従は、勤学人の移動、福州での「進京」「存留」「摘回」への再編を必要とするものであった。

では、なぜ福州到着後に再編を必要とする主従が、琉球出発時に編成されていたのであろうか。この問題について評者は、例えば船間の問題が関係していたと考える。船間の分配は、渡唐使節への貿易権の保証（報酬）を意味するが［真栄平 1986］、この船間の割り当ては出発時の主従を単位として行われていた。そもそも渡唐役人――とりわけ才府・官舎・大筆者・脇筆者――への就任には、王府官人制度内における功績の積み上げが前提とされ、国内論理が強く影響していたこ

とが明らかになってきている［山田 2011］。また、従人の推薦（おかず）自体が渡唐役人にゆだねられていることは本書でも指摘されており、主従の編成（選抜）自体が貿易権の分配と絡んだ一種の権益となっていた可能性も想定されよう。渡唐使節を構成した主従についての評価は、外交使節としての役務との関係のみならず、これら国内官人制度の運営論理との関わりなどからも検討される必要があろう。渡唐使節を外交や貿易の実施者という存在に閉じ込めず、さまざまな視点から検討していくことが使節の実態を考える際に必要となってこよう。

第三に、渡唐使節の構成に大きな影響を与える福州での再編や符文の役割について、本書は主に 18〜19 世紀の事例を対象としているが、より時代的な変遷を踏まえた検討がなされるべきであろう。確かに本書の題名には「近世」（＝近世琉球期 1609〜1879 年）の語が付され、近世期における変化は概観されているが、より厳密には前代（＝古琉球）からの変化も意識されるべきであろう。例えば、16 世紀半ばまでの符文には、上京人員のみが記載され、符文の役割とされた渡唐使節全体の証明という役割が使用当初から想定されていたとは考えにくい［山田 2012］。同じく 15 世紀後半までの進貢使節には、船毎に編成された上京使節が乗り込んでおり、福州での使節の再編は行われていなかった可能性がある［山田 2009］。これら符文の機能や福州での再編といった問題の変遷を想定すれば、近世期の符文の使用に積極的な意味が見いだされない（267 頁）や使節が二度編成される（＝福州での再編）といった著者の指摘（135 頁）がなぜ近世期に定着していたのかをより説得的に説明することが可能になったのではないだろうか。「近世」という時間にのみ囚われず、明代または古琉球期から継続されてきた点を踏まえ渡唐使節の性格を位置付けて行くことも必要であろう。

以上、ここまで本書の論点整理と評者が感じたいくつかの疑問点や今後の課題について述べた。ここまでに評者が示した疑問点や問題点の中には、著者の示した研究成果を前提とした問題も多く、疑問とするよりはむしろ関連する今後の課題に属するものとも考える。その意味で本書の各論考によって示された渡唐使節にかかわる成果は、これまでの琉中交流史研究を数段高いレベルへと押し上げたことは間違いない。本書の刊行が、琉中交流史研究にとって大きな意義を持つことを確認し、著者の研究の今後の進展を期待したい。

参考文献

麻生伸一（2011）「『近世琉球中国交流史の研究』ミクロの視点で諸相講究」『琉球新報』2011 年 10 月 30 日文化面、沖縄。

深澤秋人（2000）「近世琉球における渡唐使節の編成——19 世紀の事例を中心に」『沖縄文化研究』26、法政大学沖縄文化研究所、23–109 頁、東京。

前田舟子（2011）「『近世琉球中国交流史の研究』渡唐使節の実像を解明」『沖縄タイムス』2011 年 12 月 10 日文化面、沖縄。

真栄平房昭（1986）「近世琉球における個人貿易の構造」『球陽論叢』、ひるぎ社、239–262 頁、沖縄。

松浦章（2012）「（書評と紹介）深澤秋人著『近世琉球中国交流史の研究——居留地・組織体・海域』」『日本歴史』773 号、吉川弘文館、121–123 頁、東京。

山田浩世（2009）「古琉球における進貢使節派遣再考」『第一回琉中関係国際学術討論会論文集』、琉中関係研究会、175–199 頁、沖縄。

山田浩世（2011）「近世琉球における王府官人制度渡唐役者——船間割当を通じて——」『日本歴史』757 号、38–52 頁、東京。

山田浩世（2012）「明清代東アジア海域における渡航証明書の役割——琉球国発行の符文・執照の

変遷を中心に」『沖縄文化』112、沖縄文化協会、98–119 頁、沖縄（同論考の初出は、山田浩世（2009）「符文・執照の役割と使節構成に関する一考察」『平成 20 年度院生班〈ヒト・モノ・思想の移動から見た文化生成の諸相〉研究成果・調査報告書』、琉球大学人文社会科学研究科、33–53 頁、沖縄）。